

第38回ムトス賞受賞団体

平和の種プロジェクト実行委員会

—平和の種プロジェクト—

プロジェクトの立ち上げ

令和4年5月、戦火を逃れたウクライナの皆さんが、避難民として高森町に来町されました。交流する中で避難民の皆さんから、ウクライナに残してきた家族を心配する言葉や、母国の平和復興を願う気持ちを聞き、心を打たれ、「私たちだから出来る支援をしたい」と考え活動を始めました。(ひまわり応援隊としての活動は令和3年4月より始めており、本プロジェクトはその中の一つです)

プロジェクトの概要

活動の流れは以下の通りです。

「ひまわり種の配布」→「ひまわりの栽培」→「ひまわり種の収穫と回収」
→「ひまわり油の製造販売」→「売上金の寄付」→「写真展の開催」



6月 種蒔き(作業後に皆で記念撮影)

これまでの活動報告

「ひまわり種の配布」「ひまわりの栽培」「ひまわり種の収穫と回収」
飯田下伊那14市町村をはじめ長野県内各地の賛同者に、約35万粒の種を配布しました。8月から9月には多数のひまわりが開花し、収穫期には企業、団体、個人から、約1.6トンのひまわり種が集まりました。(新聞紙上やテレビニュースでも、その都度取り上げて頂きました)



8月 遊休農地が一面のひまわり畑に変身

「ひまわり油の製造販売」

阿南町の加工所等でひまわり種を絞りと、ひまわり油を製造し販売しています。

「売上金の寄付」

ひまわり油の製造費用を除く売上金の全額を寄付する予定です。

「写真展の開催」

ひまわりの開花風景や、プロジェクトに関する写真や資料の展示を予定しています。



9月 収穫(大変暑中での作業でした)

活動を振り返って

プロジェクトを行う中で強く感じたことは、「想いは必ず繋がる」ということです。初めは小さかった活動も、人から人に心が通じ、次第に大きく成長していったような気がします。また、趣旨に賛同しご協力下さった方々の中には、「遊休農地や耕作放棄地の活用」、「教育的プログラムへの組み込み」、「地域組織の活動として」、「高齢者施設でのアクティビティーとして」、「ひまわり油を使用した地場製品の開発」等々、様々な形で活用されました。ひまわりはもちろんですが、プロジェクトの活動自身も大きく広がりのある可能性を持っていると感じています。これからも歩みを止めず、一步一步、地域の皆さまと共に活動して参ります。

■委員長：堀本喜正ほりもとよしまさ 副委員長：菅沼文昭すがぬまふみあき

■会員数：10名

■活動地域：飯田下伊那14市町村をはじめ長野県内各地

■配布した種の総数：約35万粒 集まった種の総重量：約1.6トン



11月 ひまわり油の製造がはじまりました

第 38 回ムトス賞受賞団体

アップルサンタ

—りんごを介した児童養護施設の子どもたちとの交流—

【活動内容】

飯田と東京の児童養護施設の子どもたちとの交流活動に取り組んでいます。夏は飯田下伊那の家庭で子どもたちを受け入れたり、自然体験を行い、秋は農家でりんごを収穫させていただき、そのりんごを送る活動を進めています。



清内路のキャンプ場にて

【いきさつ】

2003 年、飯田市公民館が若者たちの社会参加活動を事業化したいと、若者たちの社会参加を進める東京の NPO 法人 NICE(日本国際ワークキャンプ)メンバーを公民館職員として迎え、事業化したのが始まりです。NICE メンバーが公民館職員を卒業した翌年度からは社会教育関係団体となり、飯田や首都圏の若者たちと、会の趣旨に賛同する大人たちが、毎年施設の子どもたちや職員約 30 人を受入れ、夏は南信濃や清内路を拠点としたキャンプや、飯田下伊那地域の家庭での受入れに取組み、秋は市内のりんご農家の協力で収穫したりんごを施設に送る交流を進めています。

【メンバー】

発足当初の中心メンバーは首都圏の大学生たちで、そこに飯田の若者たちや、趣旨に賛同する大人たちが関わっていました。これまで参加したメンバーは 50 人を超えていますが、発足当初大学生だったメンバーも年を経て社会人となったり結婚し、全国各地に散らばっており、学生時代のような自由がきかなくなりましたが、必要な資金をカンパしあうなど、できることで関わってくれています。当初児童養護施設の職員だったメンバーが、施設を退職した後スタッフとして関わっているケースもあります。



家庭泊 原さんご夫婦



家庭泊 小池さん

【学びや変化】

メンバーの中には、生きづらさを抱えた若者もいましたが、子どもたちや同世代の若者たちとの交流や、活動の中に自身の役割を持つことを通して、学び成長しています。

子どもたちを受け入れる家庭では、子どもたちとの交流を通して、改めて子どもの育ちについて考える機会となっています。

小中学校時代を通して続けて参加している子どもたちは、飯田を第二のふるさととしてとらえてくれており、また、受け入れたメンバーの同世代の子どもたちと、その後も続くつながりも生まれています。

子どもたち、若者、関わる大人たちそれぞれにとって、このつながりがかけがいのないものとなっています。



りんごの収穫



上野で子どもと再会

- 代表者 岡部 美紀
- 発 足 2003 年度
- 会員数 56 名

※プライバシー保護のため、写真は一部加工を行っています。